

林英臣氏のメルマガ 未来の姿」

社長の性格によって違う生き残り方」

？未来の姿は「会社の種」にある

4年後の2010年に、会社がどうなっていたいのかを、まずイメージすること

それをゴールと定め、ゴールから逆算して、1年後・2年後に、何をどこまで到達させるかを描く。そして、それを日々の業務に落とし込み、その通り実行すればいいのである。

筆者は「**最初に無いものは、最後まで無い**」と考えている。植物の「種」を思い起こして欲しい。将来どんな木や草に成長するかは、あらかじめ種の段階で決まっている。企業も同様で、未来の姿は「会社の種」にあるのだ。それが「経営者の志」である。

「2・6・2の法則」を知れ

では、どういう志を持ったらいいのか。それは経営者のタイプによって違う

人が集まれば「2・6・2」に分かれる傾向的の法則があるという業界においても、仲間を引っ張っていきける「前衛2割」と、それに導かれる「追従6割」。

それから、変化についていけない「後退2割」に、大雑把ながら分かれるだろう。

自分は「前衛2割」タイプに属すと自認する経営者なら、迷うことなく前に進んだらいい。貪欲に先端情報を吸収し、業界に先駆けて新しいシステムを導入する。先頭に立って目標を示し、それに対応できる人材育成に励む。リスクを恐れず、変化に躊躇しない姿勢だ。

「前衛」タイプは、業界に対しても、自社に対しても、自分に対しても、常に危機感を抱いている。幹部社員がホッと安心するときだって、危機意識を緩めない。その上で、この方向に進めば、きっと生き筋があるという「阿らかの確信」をつかんでいるのだ。

「追従」タイプの押さえるべきポイントは二つ

ただし、どんどん前に進む生き方に、性格的に向かない経営者も多い。周囲を眺め、安全を確認し、後からついていくほうが居心地のいい性格だ。それが「追従6割」タイプで、実は戦国乱世も、このタイプが多数派だった。

「追従」タイプの場合、前衛に生きることを強いられると、神経が保たなくなる。「前衛」タイプならば、リスクを背負う緊張感によって、士気を沸き立たせることができる。ところが「追従」タイプになると、心配・心労が重なれば過労となり、悪くすれば自滅しかねない。前衛的の人生は、万人向けではないのだ。「狂」を貫いた幕末志士も、全体からすれば僅かな数であった。

では「追従」タイプは、どう生き残ればいいのか。答えは、とにかく「真面目に仕事すること」につきる。その押さえるべきポイントは二つ。**一つは、成績の良い他社を、お手本として見習うこと。もう一つは、自社の悪い点を直すこと。**

それには、嫉妬しないで他社から学び、素直に顧客の不満・苦情を聞ける態度が肝要だ。

残りは「後退」タイプだが、変化の激しい中であって、このタイプが2010年まで存続するのは大変だろう。高いところから見れば、消え去る会社も、業界全体のために必要な新陳代謝なのだ。そう考えて、静かに見送るしかあるまい。

<コメント>

「2-6-2の法則」経営者は、自分はどのタイプかを知れ！